

## 第1話 『団地妻』シリーズの衝撃

### ロマンポルノ前夜

日活ロマンポルノがスタートを切ったのは1971年11月20日土曜日。『団地妻 昼下がりの情事』（監督・西村昭五郎／主演・白川和子）、『色暦大奥秘話』（監督・林功／主演・小川節子）の2本立だった。翌72年に入るとまもなく、ピンク映画からの、いわゆる「買い取り作品」が加わって3本立興行になるのだが、当初は日活作品のみの番組だったのである。

ただ、ロマンポルノを上映する劇場がどこになるのか、われわれ映画ファンにも皆目見当がつかなかった。それまであった日活直営の劇場は、旗艦（フラッグシップ）映画館と扱われていた新宿日活をはじめとして経営悪化のためにすべて売却されていたからだ。

ちなみに、この年4月24日に公開された渡哲也主演の『関東破紋状』（監督・小澤啓一）のラストにおけるヤクザ同士の死闘場面は、取り壊され新宿丸井（現在の新宿マルイ本館）になる直前の廃墟と化した新宿日活劇場で撮影されている。では、その『関東破紋状』をわたしはどこで観たのかというと、新宿大映である。

両社とも経営が行き詰まって70年5月から配給面で合同し「ダイニチ映配」（大映のダイと日活のニチ、このネーミングを見ただけでも追い詰められた余裕のなさうかがえる）になっていた関係で、まだ残存していた新宿大映が日活、大映両社作品の上映館になっていた（銀座は銀座大映、渋谷は渋谷大映と、東京では大映の映画館が残っていたのは大映直営でなく興行会社の所有する劇場だったからなのかもしれない）。この映画館も今はなく、現在は「コメ兵」新宿店が入っている第二武蔵野ビル。なお、新宿日活は新宿マルイ本館になっているが、新宿東映は新宿マルイ アネックスとなっており、その9階から13階が都市型シネコン新宿バルト9となって名残をとどめている。

しかし、経営がより早く悪化していったのは大映だった。この年6月頃、映画製作からの撤退が決定されダイニチ映配は崩壊することとなった。これを受け、日活は単独で生き残るためにロマンポルノ路線への転換を決心するのである。8月25日公開の『八月の濡れた砂』（監督・藤田敏八）『不良少女魔子』（監督・蔵原惟二）の2本立を最後に一般映画の製作から撤退しロマンポルノの製準備に取りかかった。

正確に言えばダイニチ映配は9月まで存続する。『遊び』（監督・増村保造）『夜の診察室』（監督・帯盛迪彦）の大映2本立と68年に作られながら、内容が地味だとして未公開のままになっていた日活映画『朝霧』（監督・吉田憲二）を送り出して幕を閉じる。

大映作品は、その後も最末期に作られた映画8本が公開され、これらは再び大映の直接配給によって上映された。それも、11月20日公開の『悪名尼』（監督・田中重雄）『蜘蛛

の湯女』(監督・太田昭和)の番組で力尽きる。冒頭書いたとおりロマンポルノのお目見えも11月20日。大映最後の番組と日活ロマンポルノ最初の番組は、奇しくも同じ日に公開されたのである。

### 大車輪の生産体制

11月23日、新宿大映でわたしは最後の大映映画を見送った。ところが、ロマンポルノの方はどこで上映されるのかがわからない。後に映画・演劇・音楽の総合情報誌として一世を風靡した「ぴあ」の創刊(最初は月刊誌で、わずか25ページ)は72年の7月である。それ以前は、新聞の映画欄や街に貼ってあるポスターを頼りに映画上映情報を自分で探すしかなかった。

新宿地区では、2週間遅れの12月4日から歌舞伎町の新宿オデオン座が上映館となるのがわかった。作品は『団地妻 昼下がりの情事』『恋狂い』(監督・加藤彰/主演・白川和子)、『女高生レポート タ子の白い胸』(監督・近藤幸彦/主演・片桐夕子)の変則3本立。これには理由があった。

映画興行の周期といえば、今でもそうであるように原則土曜封切りの1週間単位である。それがロマンポルノの場合、およそ10日単位で組まれていた。それまでの日本映画興行の常識である最低2週間の上映には耐えきれないと考え、次々新作を送り出すことで目先を変えようとしたのだろう。11月20日の次は12月1日、11日、18日そして正月興行用に28日と、矢継ぎ早に2本立て番組が公開されていた。

なにしろ、『団地妻 昼下がりの情事』の主演女優・白川和子の次の主演作『恋狂い』はすぐ次の番組だったし、『色暦大奥秘話』の主演・小川節子の次回作は次の次の番組『色暦女浮世絵師』(監督・曽根中生)だった。『女高生レポート タ子の白い胸』に至っては、わずか3番組後に同じ主演・片桐夕子、監督・近藤幸彦でシリーズ第2作『女高生レポート 花ひらく夕子』が登場している。大車輪の生産体制だったと言っている。

したがって12月4日の時点では、既に4本の作品が公開されていた。新宿地区の封切館となった以上、その後は全国公開のペースに合わせなければならない。1週間後の11日には次の番組が出てくる……というので、新宿オデオン座は公開作のうちから3本を選んで4日から10日までの1週間興行として番組編成したわけである。

### 初見は新宿オデオン座

新宿にロマンポルノが登場する12月4日、わたしは劇場へと向かった。今でこそ閉館が相次ぎ、当の新宿オデオン座も2009年11月末で姿を消して、わずかに新宿ミラノ1・2・3とシネマスクエアとうきゅうの4館が残っているだけだが、71年頃の歌舞伎町は映画館が林立していた。

現在の新宿ミラノ3館は、それぞれ新宿東急、ミラノ座、名画座ミラノと称し、それら

が収まる巨大ビルは歌舞伎町広場のランドマークの様相を呈す。噴水のある広場を挟んで反対側には新宿コマ劇場があり、その地下にコマ東宝、隣に新宿プラザがあった。新宿東急の脇に新宿名画座。そして広場の周囲には、他に新宿地球座、新宿ジョイ・パックが、いくつかのスクリーンを持っていた。

新宿オデオン座もそのひとつであり、新宿東急のビルに向かって右隣に3スクリーンを擁していた。ロマンポルノを上映するのは、地下である。このスクリーンは、それまでも日本映画の上映館だったと思う。その頃は日本映画しか観ていなかったわたしにも、なじみの劇場である。

劇場が混んでいたのを覚えている。日本映画が斜陽の極みだった時期である。しかも、観客が入らないせいで没落した日活の映画だけに、ロビーに客があふれている光景は、それだけでうれしい気がした。ポルノ映画を観に来ている感じの人はほとんどおらず、日本映画ファンが集まっている雰囲気だった。立ち見とまでは行かないが、客席もかなり埋まっている。

さて、そこから、わたしにとってのロマンポルノ初体験は始まった。

### 当時の印象

『恋狂い』は、それまでの日活映画の雰囲気をも最も濃く残していた。失踪した人妻を巡るミステリー仕立ての展開に、港町、夜の歓楽街といった背景は石原裕次郎や渡哲也の日活アクション映画を想起させたし、69年に「かもめ」「夜が明けたら」でメジャーのレコード・デビューし当時売り出しの浅川マキの歌が使われたのは、日活ニューアクションと呼ばれる日活一般映画末期の新感覚路線において、『女番長 野良猫ロック』(70年/監督・藤田敏八)で和田アキ子の「さすらいのブルース」や『八月の濡れた砂』で石川セリの歌が流れたのを思い出させる。

『女高生レポート タ子の白い胸』は、ダイニチ映配で日活作品と同じ系列館上映された大映高校生シリーズの延長上に感じられた。このシリーズについては改めて詳述するが、「18歳未満お断り」=現在のR18にならない範囲で裸やセックスがらみの題材を入れて売り物にしている作品群だ。『十代の妊娠』シリーズ、『高校生番長』シリーズ、『高校生ブルース』シリーズなど多くの作品が出た。しかし、基本的には青春映画の枠組みの中にあつたことは、後ほど述べる。

日活ニューアクションのファンであると同時に大映高校生シリーズの熱烈なファンだったわたしにとって、青春映画からポルノへと明確に一線を越えたという意味で、この映画の印象は強烈だった。キネマ旬報「読者の映画評」欄に投稿し掲載された『女高生レポート タ子の白い胸』評を引用してみよう。

【片桐夕子という新人女優さん 役名も同じなのだが この、一時間あまりの映画の中で、いったい何回、裸になったことだろうか。彼女の白いからだ、むきだしになるたびに、

脇腹のホクロが、なんともいえず哀れで、悲しい。いたいたしい。

夕子さんは、美しいセックスというものを、探求しようとする。だが、"美しいセックス"なんて、おそらく、童話の青い鳥と同じように、とりたてて探しまわっても見つからないものなのだ。それを見つけようと焦って、夕子さんは不幸に墮ちる。

やたら旺盛な好奇心や、こわいもの知らずが、若さの持つ特質であるならば、夕子さんもまた、それにかかられて探求を始めるのであり、それゆえに、その結果の悲惨さは、青春の苦さ、という普遍的なものに結びつけていいだろう。

日活ロマン・ポルノの出現で、はじめて、いわゆるピンク映画を見たのだけれど、日活の作家たちが置かれている困難な状況を、まざまざと見せつけられた思いだ。なにしろ、ストーリーの中にきわどいシーンがある、というのではなく、きわどいシーンが羅列されて、その間をストーリーで埋めているという感じなのだ。

このような困難の中で、新人・近藤幸彦監督は、状況を逆手に取って、つまり、商業化されたセックスであるピンク映画の中で、"美しいセックス"を探求させることによって、みごとに、実に苦々しく、青春の苦渋を描きとったといえる。

それにしても、作家が、こういう形でしかものを表現できないというのは悲しいことだ。青春映画「夕子の白い胸」は、十八才未満お断り。この驚くほどナイーブな眼で作られた映画を、ナイーブな世代は見るできないのだ。多くの映画ファンも見逃してしまうだろう。せっかく、有能な新人作家が登場したというのに。】(キネマ旬報 1972年2月上旬号 表記は原文ママ)

ここには、ロマンポルノ登場を受け止める19歳の日本映画ファン、この時点でセックスの経験がない女性に縁のない青年、そして常識的な公序良俗概念から抜け切れていない未熟な若者の考え方が、愚かなほど率直に示されている。40年近く後に自分で読んで、恥ずかしくてたまらなくなってしまう。

それでもここに引用するのは、その時代の偽らざる気分をわかってもらえると思うからである。

### ピンク映画の存在

わたしが『女高生レポート 夕子の白い胸』を「ピンク映画」と表現しているのは、ロマンポルノがスタートする時点での正確な呼び方である。すぐにロマンポルノはそれ自体が呼称となり新たなジャンルとして映画界に認知されたが、そうなるまでの短期間は「ピンク映画」の新しい形態と認識されていた。日活の社内でも、ロマンポルノを製作することを決定する段階では、自社が「ピンク映画」を作ることの可否について議論していたと当時の関係者は証言している。

また、作り手たちがロマンポルノを撮ることに戸惑いを感じていたというのも、偽らざる事実である。多くの俳優たちをはじめ、スタッフもかなりの数が、ロマンポルノへの移

行に抵抗を感じて退社していた。残った人たちも、それぞれに何かを乗り越える気持で撮影現場に臨んでいた、というのは関係者の回顧談等でも明らかになっている。

そうした戸惑いは、観客であるわたしにもあった。それまで観ていた日本映画は、大映高校生シリーズだろうと、あるいは東映の『温泉こんにやく芸者』(70年/監督・中島貞夫)などの温泉芸者もの、『驚異のドキュメント 日本浴場物語』(70年/監督・中島貞夫)などのセックスドキュメントものにして、一般の映画館で観る一般映画である。たとえ18才未満お断りの作品があっても、それはその作品に限った特別措置だった。

しかしピンク映画は違う。上映館は、それ専門の劇場であり、場所も一般の映画館とは違う裏通りであることが多かった。高校を出て田舎から上京し大学に入ったばかりの世間知らずの若者には、近づき難い感じがあったのも正直なところである。しかも、そこで上映される作品はすべて18才未満お断りの成人向け映画である。

ロマンポルノもその意味では同じなのだが、新宿オデオン座のように、それまで一般映画を上映していた映画館がロマンポルノ封切館となることで抵抗感は少なかった。また、『恋狂い』のように日活アクションやニューアクションを思い起こさせたり『女高生レポート タ子の白い胸』が大映高校生シリーズの延長にある感じがしたりする効果もある。デビュー作の近藤幸彦監督、『女子学園 おとなの遊び』(71年)に続く2作目の加藤彰監督はともかく、『競輪上人行状記』(63年)以来14作のキャリアを持つ中堅である西村昭五郎監督が撮るのは、それが一個の映画作品であることを感じさせるに十分だった。

とはいえ、当時のわたしのピンク映画に対する無知と偏見は、若年ゆえの未熟では免責されないくらいひどいものがある。この年71年、若松孝二監督は『理由なき暴行』『真昼の暴行劇』『日本暴行暗黒史』の3作を世に問い、69年に『ニュー・ジャック&ヴェティ』でデビューした沖島勲監督が『モダン夫婦読本』を撮り、『私を犯して』で小水一男監督がデビューしている。ピンクの世界で生まれている映像作品の価値に、わたしはこの時点でほとんど気づいていない。

### 『団地妻』といえばロマンポルノ

『団地妻 昼下がりの情事』は、最もオリジナル色の強いロマンポルノとして登場した。39年後の2010年、日活は「ロマンポルノ・リターンズ」製作委員会を作り、ロマンポルノの再来を企画する。そのときにリメイクの題材として選ばれたのが『団地妻 昼下がりの情事』(2010年/監督・中原俊/主演・高尾祥子)である。この作品がリメイクされたのは、単にロマンポルノの第1作というだけの理由ではあるまい。

「団地妻」という名称は、本来一般的に使われる。単純に、団地に住む妻、という意味である。ネット上のフリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)でも、次のように定義されている。

【団地(企業の社宅等を含む集合住宅)に入居している主婦のことで、主婦同士の織りな

す人間関係を表す用語である。昼ドラのテーマの定番であるが、現実社会における団地妻の実態については、社宅という閉鎖的な環境ゆえか外部から窺い知ることのできない部分が多い。】

1960年頃から、高度経済成長の始まりと軌を一にして団地ブームが起きる。地方から都市部に大量の労働者が移入し、彼らが結婚して核家族を作っていくに当たり、団地は必須の存在だった。都市部では各地に大規模団地が生まれ、流行の最先端という趣があった。そのバリエーションとして社宅がある。これも、一戸建て長屋の形式から団地形式へと変化していく。

鉄筋コンクリートの高層団地は、高度経済成長のプラスイメージとともに、輝かしいものだった。そこに入居するのは若いカップル、夫婦の憧れの的だったと言っていい。白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の家電3品目が「三種の神器」と呼ばれたのもその頃である。団地に「三種の神器」を揃えることがステイタスだった。

また、団地は一戸建てのように家の外にゴミを掃き出すことが難しく、ほうきの簡便さが半減したため電気掃除機を普及させることになった。洋室形式が取り入れられ板の間だけでなく畳にも絨毯を敷くのが流行したためほうきではさらに掃除がしにくくなり、電気掃除機の役割が大きくなる。このように、団地は日本人の生活様式さえ変え始めていた。

団地ブームから10年が過ぎ、最初の華々しさが薄れ新しい住居形式の人間関係が鬱陶しさを感じさせる場面も増えてきた。テレビの昼ドラなどで取り上げられるのは、そうした主婦同士の交友関係から生まれる物語だった。夫同士が同じ会社に勤める社宅の場合は、さらに複雑なものがあったろう。会社における夫同士の上下関係がからんで、さらに複雑な人間模様を生み出す。

入居者も、10年経つと年齢を重ねる。20代後半から30代だった若夫婦たちは30代後半から40代へと入り、夫婦の間にもさまざまな要素が介入してくる。夫の浮気もあれば、妻の火遊びも生まれる。そこに着目したのが『団地妻』シリーズなのである。

『昼下がりの情事』は、そんな団地の夫婦にありがちな会話から始まる。性生活に満たされない妻が、控えめに不満を述べ、夫は仕事が忙しくて疲れているんだ、と言い訳する。会社のために24時間戦い、社畜とまで呼ばれた高度経済成長日本のサラリーマンの面目躍如といおうか。そこから、妻のちょっとした浮気心からの火遊びが売春組織へ引きずり込まれるおぞましい展開が始まる。結局、会社のために裏取引に手を染め取引先外国人をセックス接待する場で夫婦が出くわす皮肉な結末を示す。

ロマンポルノ以前にも、「団地妻」をそんな淫靡なイメージの言葉として使った例はあったろう。しかし、『団地妻』といえばロマンポルノ、というブランド化によってこの言葉に新しいイメージを付与したことはまぎれもない事実である。

『団地妻』シリーズは、『昼下がりの情事』に続き、72年だけで、『しのび逢い』（監督・西村昭五郎／主演・白川和子）、『忘れ得ぬ夜』（監督・遠藤三郎／主演・宮下順子）、『昼下

りの悶え』(監督・西村昭五郎/主演・二条朱実)『女ざかり』(72年/監督・遠藤三郎/主演・宮下順子)と5作が公開された。その後も73年4本、74年から77年まで年2本ずつ、78年1本、79年2本と70年代を通して20本が作られている。

それが、80年代に入るとすっかり消える。外部から買い取りのピンク映画系作品で84年に『団地妻 サラ金地獄』(監督・白井伸明/主演・志水季里子)86年に『団地妻 不倫の果て』(監督・鈴木耕一/主演・黒木玲奈)があるようにピンク映画の世界ではちらほら見かけるものの、ロマンポルノの題名から「団地妻」は退場してしまう。団地ブームから20年過ぎると、入居者は40代50代になってくる。実際、77年に団地ブームにさっそうと登場した巨大団地・高島平団地を入居するかどうか見学に行ったとき、話題は高層団地屋上からの飛び降り自殺の多さであり、若い夫婦が希望に満ちてそこに住むという雰囲気は明らかに薄れていた。

80年に『ズームイン 暴行団地』(監督・黒沢直輔/主演・宮井えりな)が作られたように、もはや団地は暴行魔が出没するような暗いイメージになってきていた。時代は、マンション・ブームに湧いていた。とはいえ「マンション妻」という言葉が流行らなかったのは、高度経済成長からバブルへ向かう世相、女性の社会進出が進んで夫の帰りを団地やマンションで待つ専業主婦が減少したこともあるだろう。85年には『人妻暴行マンション』(監督・斉藤信幸/主演・渡辺良子)が作られているけれども。

### 新旧「団地妻」の顔合わせ

2010年にリメイクされた『団地妻 昼下がりの情事』は、ロマンポルノの現場で助監督として育ち『犯され志願』(82年/主演・有明祥子)で監督デビュー以来7本のロマンポルノを演出した中原俊が監督、ロマンポルノの企画者として数多くの作品を手がけ現在は脚本家として活躍する山田耕大が脚本を書き、ロマンポルノの撮影現場を最も深く知るプロデューサーの一人である成田尚哉が企画を担当している。

いわば、ロマンポルノのオールスターと言える顔ぶれだ。それゆえ、作り方や味付けを熟知した作り手たちならでは、現在版ロマンポルノになっている。

そして団地は、建設ブームから50年。今や高齢者が多く住む場になっているのは周知の事実である。高島平団地では団地全体の高齢化問題を解決するために、近くの大東文化大学と「みらいネット高島平」プロジェクトを形成し、新たな取り組みを始めている。多摩ニュータウンなど多くの団地でも同じ問題を抱えているようだ。

2010年版『団地妻 昼下がりの情事』は、高齢化が進む様子が自治会会議の場面などでリアルに描かれる。ヒロイン夫婦は、その中にあって数少ない若夫婦ということで、何かと噂の種になったり年配者のペースに合わせることを強要されたりする。彼女のことをあれこれ詮索する50代の暇な主婦を演じる志水季里子は、『ブルーレイ大阪』(83年/監

督・小沼勝)で主演デビューした後、若い未熟な女優を助ける立場でロマンポルノを支えてきた実力派女優である。

そして、ここにあるのは60年代、70年代の高度経済成長期モーレツ社員とは違う。世界金融危機以降の、リストラ、派遣といった言葉が飛び交う厳しい日本経済の中で働く人々だ。ヒロインの夫は、会社を支えるために休日出勤するし、彼女が惹かれる健康製品セールスの男は、厳しいノルマのある非正規労働者で、妻と別れ幼い息子と2人の父子家庭を、団地の中で営んでいる。

経済が右肩上がりの中で欲望に迷い破滅するのが71年版の「団地妻」夫婦なら、2010年版は、セックスレス夫婦という風潮が背景にあり、貧しさの影におびえながら生きる者たちのセックスによる自己確認だったり自己回復だったりする。40年の時間を隔てて、それぞれの世相の違いを的確に反映させている。

ロマンポルノとは、時代を映す鏡だと言えるのかもしれない。

10年版『団地妻 昼下がりの情事』には、71年版で主演した白川和子が健康製品セールス会社のやり手女社長の役で姿を見ている。

白川和子は1947年生まれ。ピンク映画ならぬ「ピンク演劇」に出演していたのを向井寛監督に見いだされ『女子寮』(67年/監督・向井寛)で主演して以来200本を超えるピンク映画に出演していた。それが日活に引き抜かれた形で新たなスタートを切ったわけだ。撮影所の衣装部で衣装合わせをしたとき、ピンクとは比較にならない贅沢な衣装環境に驚いたという逸話が残っている。『実録白川和子 裸の履歴書』(73年/監督・曽根中生)を最後に結婚のためロマンポルノを引退するまで1年3ヶ月の間に20本の作品に出演した。のち76年『青春の殺人者』(76年/監督・長谷川和彦)でカムバックするが、ロマンポルノへの出演は二度とないままだった。

今回の主演女優・高尾祥子は、柄本明率いる劇団「東京乾電池」所属の舞台女優である。キネマ旬報2010年3月上旬号で新旧「団地妻」の対談が企画され、二人は顔を合わせた。ロマンポルノ出演が父親に露見して白川がたいへんな目に遭ったというのに対し、高尾の場合は、本人の話によれば「電話で話をして私も言い訳っていうか『映画なんだから大丈夫だよ。昔白川和子さんって女優さんがやってて』って言ったら『知ってる、知ってる』って。お父さん、白川さんのことが好きなんだなと思って。『そんなら、しっかり濡れ場をやってこい』って言ってくれた」とある。

高尾の父親は白川和子のロマンポルノを観た世代。だから、「映画なんだから大丈夫だよ」と娘に言われて納得できるのである。白川の父親はおそらく大正生まれだろう。同じ大正生まれのわたしの亡くなった父親を頭に浮かべてみれば、ロマンポルノが彼らの想像を絶するものだったことは想像に難くない。娘がそれに出るなんて、驚天動地の出来事だろう。



ロマンポルノ登場の時代と現在の間には、これほど大きな隔たりがあるのだ。